慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジュール・ヴェルヌ『カリフォルニアの城：転石苔を生ぜず』その1(翻訳)
Sub Title	Jules Verne, Les Châteaux en Californie : Pierre qui roule n'amasse pas mousse, Scènes I−VIII (traduction)
Author	Verne, Jules(Niijima, Susumu) 新島, 進
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.49/50 (2009.) ,p.109- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges dédiés à la mémoire du professeur OGATA Akio = 小潟昭夫教授追悼論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20091225-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジュール・ヴェルヌ『カリフォルニアの城――転石苔を生ぜず』その１（翻訳）

新島　進 訳・解題

解題
ジュール・ヴェルヌ『カリフォルニアの城』と レーモン・ルーセルの習作短編

ジュール・ヴェルヌはその《驚異の旅》連作により、冒険科学小説というジャンルを開拓した作家として知られるが、エッツェル編集のもと『気球に乗って 5 週間』（1863 年）を刊行する以前、20 代の文学修行時代には、少なからぬ数の詩編や戯曲を書いていた。19 世紀文人の例に漏れず、彼が若き日に成功を夢見た舞台は演劇界だったのである――その夢は、散文で名を成したのち、演劇版『80 日間世界一周』や『ミシェル・ストロゴフ』で実現することになる。ここ数年、多くが未発表だった初期の詩編、戯曲作品の刊行が進められており[1)]、今後のヴェルヌ研究では〈エッツェル以前のヴェルヌ〉が一層重要になると思われる。

今回、翻訳を試みた『カリフォルニアの城』もヴェルヌ若き日の戯曲作品のひとつである。その頃すでにパリに上京していた彼は、リリック座で秘書を務めながら作品を書き継いでおり、『カリフォルニアの城』は1852年（ヴェルヌ 24 歳）、「家庭博物館」誌に発表されている。その後、精神分析系の批評家マルク・ソリアーノによって 1978 年、初期短編 3 編とともに単行本にまとめられた。なお「家庭博物館」誌掲載時は、同誌の編集長ピトル＝シュヴァリエとの連名だったが、ソリアーノは、言葉遊びの過激さ、またそこ

に隠された性的含意から、作品は家庭用の読み物としては不適切であり、よってヴェルヌ単独での筆か、ピトル＝シュヴァリエがテクストを読んでいない／読めていなかったことを示唆している[2)]。

筋だけを見れば、特に目新しさのないブルジョワ劇である。富を求めて新大陸に渡ったパリの設計建築業者デュブール氏が数年ぶりに帰ってくる（カリフォルニアがゴールドラッシュに沸くのは 1842 年頃）。夫からの手紙を受けとったデュブール夫人は、良人の帰宅前から散財をはじめ、その娘アンリエットと恋仲にあるアンリは、デュブール家の財政状況が激変することで結婚話が破談にならないかと気が気ではない。やがて乞食の格好に身をやつした父親が帰ってくると、話はその後も二転三転して……。金（かね／きん）という主題、あるいは婚姻の問題など、のちの作家作品を考察する際に無視できないテーマも見いだせるが、むしろこの戯曲がこれまで（ささやかな？）注目を集めてきたのは、「手法」で知られる詩人レーモン・ルーセルとの関係からであろう。どういうことか。

Les Châteaux en Californie−Pierre qui roule n'amasse pas mousse（カリフォルニアの城――転石苔を生ぜず）というタイトルを冠するこの作品は、Père qui roule n'amasse pas de mousse（父は苔［＝財産］を集めない）という一文で幕を閉じる[3)]。つまり、ほとんど同じ音で構成された文が物語をはさむ形式になっているのである。この尻尾（ウロボロス）を咬むヘビ的な構造は、レーモン・ルーセルが、地口を用いた独自の文学創作法「手法」を開発していた折、習作として書いた短編のそれと同様のものである。たとえばルーセルの短編「爪はじき」（1900 年）[4)] は Les vers de la doublure dans la pièce du « Forban talon rouge »（『赤いかかとの悪人』という芝居における代役の詩）という一文ではじまり、それと音が似るが意味の異なる Les vers de la doublure dans la pièce du fort pantalon rouge（赤い丈夫なスボンの布地の、裏地についた虫）という一文で終わる。ルーセルのヴェルヌへの偏愛を考えれば、『カリフォルニアの城』がルーセルの習作短編に直接の影響関係を与えた可能性があり、これは検証に値する。

ルーセルが生まれたのは『カリフォルニアの城』発表の四半世紀後

（1877 年）ではあるが、ヴェルヌの多くの初期未発表作品と違い、本戯曲は公に刊行されているため、ルーセルが自ら作品を入手した可能性はある。またルーセル自身の証言が真実ならば、彼はヴェルヌと 1899 年に会っている。これはルーセルが「爪はじき」型の短編を書いていた時期に一致するのだ。あるいは、その会合でヴェルヌから秘儀の伝授があったのだろうか？　しかし物的な証拠や証言はなく、ルーセルが『カリフォルニアの城』を実際に読んだか否かについては結論が出ない。むしろヴェルヌがアルフレッド・ド・ミュッセの格言劇（たとえば『戯れに恋はすまじ』）に感化されているならば[5)]、格言劇そのものの構造とルーセルの「手法」との関係を考察する必要があるだろう。

またより重要なのは、『カリフォルニアの城』の登場人物のひとり、カトリーヌが強迫観念的に発する地口ではないかと思われる。デュブール家の料理女である彼女は作中、「民の知恵」、つまり諺や慣用句の類を連発し、さらに地口を使ってそれを滑稽な表現に換えてしまう（「カトリーヌの言い換え」表を参照のこと）。作品のメインタイトル『カリフォルニアの城』自体、「スペインの城（＝空中楼閣；中世の騎士がスペインの封土をもらっても、まずは自分で城を攻め落とさなければならなかったことから、妄想に近い計画を立てること）」のもじりになっていることは言うまでもない。あるいはカトリーヌが « mieux vaut tard que jamais（遅くなってもないよりはまし）» という慣用句を « mieux vaut lard que navet（カブよりラードのほうがまし）» と言って笑わせるとき、これはルーセルにおける「手法」の第一段階、たとえば « demoiselle à prétendants（婚約者のいるお嬢さん）» ――『カリフォルニアの城』のアンリエットがまさにそうだ――を « demoiselle à reître en dents（歯でできた傭兵の撞槌）» とする言葉の解体作業を思い出さずにはいられない。

この師弟の lard、もとい l’art を検討するにあたり、まずは『カリフォルニアの城』を本誌上で数回に分けて全訳してみる。底本としたのは前記のマルク・ソリアーノが再録したテクストである（註 2 を参照）。訳出に加え、カトリーヌによる格言、慣用句の言い換えを抜き出して表にまとめる。全訳

終了後、格言劇とヴェルヌ、そしてルーセルの「手法」について論じることにする（仏語論文を予定）。

1）詩編については *Poésies inédites*, Paris, Le cherche midi, 1989. 戯曲については *Théâtre inédit*, Paris, Le cherche midi, 2005 がある。
2）Marc SORIANO, *Portrait de l'artiste jeune. Les quatre premiers textes publiés de Jules Verne*, Gallimard, Paris, 1978, p. 42.
3）なおデュブール氏の名は François であるが、ヴェルヌ自身の父親の名は Pierre である。
4）「黒人たちのあいだで」をはじめとする、ほかの習作短編は生前には発表されず、死後出版の『私はいかにして或る種の本を書いたか』（1935 年）にまとめて収録されることになる。
5）詩については「ロマン主義の潮流に属する〔ヴェルヌ初期の〕多数の詩作品は、ヴィクトル・ユゴーやアルフレッド・ド・ミュッセといったモデルを模倣」しているとフォルカー・デースが述べている。フォルカー・デース「栄光を求めての試行錯誤」石橋正孝訳（水声通信、27 号、2008 年 11/12 月合併号所収）、101 頁。

ジュール・ヴェルヌ
『カリフォルニアの城――転石苔を生ぜず』その 1

一幕の格言喜劇

人物

デュブール氏、設計建築業者
アンリ・フレモン、仲買業者
アレクシス
デュブール夫人
アンリエット・デュブール、デュブール氏の娘
マルグリット、デュブール氏の子
ポール、同
カトリーヌ、料理女
クララ、カトリーヌの娘

婦人帽子屋（女）、婦人服屋（女）、生地商（男）、水運搬人（男）

1852年のパリ。市民階級の屋敷のサロン。豪奢だが窮乏が見てとれる。奥にドア。両側にドア。

第一場

アンリ、カトリーヌ

カトリーヌ：おや、アンリさん、あなたさまで。ふた月ぶりですね。私どものことなんて、きれいさっぱりお忘れだと思ってましたよ。

アンリ：この私が忘れただって、カトリーヌ。この家のみなさんのことをずっと考えていたよ。

カトリーヌ：つまりはアンリエットお嬢さまのことを。

アンリ：とりわけお嬢さまのことを、ああ、そうとも。

カトリーヌ：結構、結構。諺に云う、いつも鋼のように垂直で[(1)]、義理と下着は欠かされぬ[(2)] あなたさまですからね、わかりますよ。

アンリ：（笑いながら）あいかわらず民の知恵の言い換えに余念がないのだな……。

カトリーヌ：ちょいとばかり笑いもないと……人生山ありダニありって[(3)]。ですが、ずいぶんと並木道を食ったものですね[(4)] ？

アンリ：私の昇進もこの出張次第だったのだ。懸命に働いたおかげで私はやりとげたよ！　社長のために三つも支社をつくった……。給料は倍だ……。それに……。

カトリーヌ：まあ！　お金じゃないのですよ……。あなたさまがここにいらっしゃる、それが大事なのです。梨でもあればまだまし[(5)] ！　って格言も……。とはいえ、2千エキュにはなりますわね……。

アンリ：加えて、利益における私の取り分がある……。

カトリーヌ：なんとまあ！　そんなになくたって世帯は持てますわ……。

アンリ：アンリエットお嬢さまに結婚を申しこめるだろうか……？

カトリーヌ：そのことで頭を悩ませることはありません……。お嬢さまのあなたさまへのお気持ちなら、宝船に乗ったつもりでいればいいのです[6]。

アンリ：ああ！　ありがとう、カトリーヌ……！　で、母上のデュブール奥さまは？

カトリーヌ：奥さまこそが問題の確信犯です……[7]。アンリさまがいらっしゃらないあいだ、ここではドッタンバッタン[8]がありました……。奥さまはアンポンタン[9]になられたとしか思えません。

アンリ：気でも違われたのか？

カトリーヌ：そんなところです。ご存じだと思いますが、私がこの家の世話になったときには、旦那さまはもうずいぶん前に家を出ていました。私と奥さまは乳飲み姉妹ですが、旦那さまのことは、どんな方かさえ知らないのです。

アンリ：そうだったね。建築のほうが休業しているところをみると、コンパスも定規も捨ててしまったようだな、ほかの多くの物と同じように。

カトリーヌ：そして、ほかの多くの者と同じように、一財産こしらえるためカリフォルニャア[10]に行ったのです……。

アンリ：そして破産したのだろう、やはり、ほかの多くの者のように！

カトリーヌ：行き着く先はそこですとも、もちろん！　ともかく旦那さまはランタンでパンがこねられると思いこんだのです[11]。船を降りると、くそ儲けだと[12]と手紙に書きました。それで奥さまの頭はささみ鶏のように[13]くるくると回ってしまったのです……。もう我を忘れて……。ビロードとダイヤモンドのことしか考えていません……。口やかましく言っても無駄でした――「『踊る人を押すな』と言いますでしょ[14]！　まずは旦那さまのお帰りを待ちましょう！　すばらしいコート[15]と呼ばれている街には用心することです（こんな信心くさい名[16]、罵らずにはいられません）。ですが私にも、カリフォルニャアにならず者の甥がいるのです。これが変わり者で、人肌あげようと[17]、まだ顎髭も生えそろわないうちに私たちのもとを去りました……。私の有り金を全部、稼ぐのに10年かかった100エキュを持って……。そして向こうに着くなり、旦那さま同様、

カトリーヌ

数百、数千エキュを送ると言ってきました……！　それが届くの届かないのって……！　もう３年、なんの便りも、風の噂もありゃしません。私にもう一度無心したほかは。野蛮人どもにエスカロップにされそうになった[18]と言ってきましてね。それは頭の皮を剥ぐって意味なんですが！　今ではつるつるの妙ちくりんになっているでしょう。金は送りましたよ、まったく！　今度目の前に現われたら……！」そんなふうに言ったんです……。それでもまあ、馬の口に乾物[19]といった感じでした。つまり奥さまはもう百万長者になった気でいるのです。

アンリ：わかります……。そして百万長者の婿を欲しがっているのだろうか？

カトリーヌ：もしも夢から覚めなければ、そうなるかもしれません。

アンリ：寒気がしてきた……。私はデュブールご夫妻のことを知っている。氏は才覚はあるが甲斐性はなく、奥さまは想像力豊かだが判断力に欠ける。

カトリーヌ：辛抱ですよ……。背後に笑うものがよく笑う[20]です！　目をお覚ましになるのもそう遠くないでしょう……。今日は藪にエビでも隠れている感じがします[21]。奥さまが、矛かなにかに突っつかれているような。賭けてもいいですが、実のない知らせだと思います。日記のなかでこしらえた夢物語です。奥さまは手によりをかけたごちそう[22]を用意しています、まるでインドの王さまでもお迎えするかのように。贅沢品を注文してサルバザールの宴[23]をご所望です。私はちょいと失礼して、青ぞうきん（トルションブルー）[24]でも着こまねば……。

アンリ：それは私の恋敵、お嬢さまを拐かそうとしている婚約者だ……。ああ、カトリーヌ、どうしたら？

カトリーヌ：ゆめゆめ舵を投げないことです……[25]。

アンリ：確かに、そのとおりだね。アンリエットお嬢さまが私を愛しているのならば、1 対 2 なのだから。

カトリーヌ：こちらは 3 ですよ！

アンリ：カトリーヌ！　おかげで力がわいてきたよ……。そういえば、アンリエットの弟と妹、それに、あなたのすてきな娘さん、クララは？　近況を聞きそびれてしまった！

カトリーヌ：お子さまたちは元気です、アンリエットさまと私がついてますから。クララもまだここにいて、特に変わりはありません。あの子もカリフォルニャアに夢中で、奥さまと一緒に店をまわっています……。あの子の頭にはごろつきの甥がいて、それを追っ払うことができないのです！——『ありのままの彼が好きなんだもん』なにかにつけて、あの子はそう答えます。申し分のない結婚相手がいたのに袖にしてしまいました。ゴム椅子の製造業者だったのですが……。まったく若さってやつは……！　あれま、誰かがこちらに来ますね。家がまるで大邸宅の玄関広間になったようだわ……。

アンリ：（カトリーヌに）私の恋敵だろうか？

カトリーヌ：（アンリに）インドの王さまよ！　黙らせますから私に任せてください。

第二場

アンリ、カトリーヌ、アレクシス（ひどく奇妙なダンディの容姿、格好。先のはねあがった髭、ぼさぼさの髪、大胆な色使いのネクタイ、ベスト、ズボン。寸足らずの黄色い外套。小さな装飾品、指輪をいくつか、目には鼻眼鏡をしている）

カトリーヌ：なんて鋭い目、山芋[26] みたい。

アレクシス：これはどうも、デュブール男爵はいらっしゃるかな……。

カトリーヌ：デュブール男爵ですって！　いったいなんのことでしょう？

アレクシスとアンリ

アレクシス：気まぐれで商売に手を出しておられるパリの紳士ですよ。氏の邸宅はここではないので？

カトリーヌ：ここですよ、他所ではなく……。

アレクシス：では男爵は。

カトリーヌ：旦那様は先ほどから不在です。

アレクシス：どこでお目通りできますかな？

カトリーヌ：カリフォルニャアの、バカを捕まえる聖者(27)で。

アレクシス：（独白で、カトリーヌを眺めながら）へんだな。この女中の声には聞き覚えがある。（声に出して）サンフランシスコですな！　デュブール氏はもうお戻りだと思っていました。

カトリーヌ：奥さまとお話しになりますか？

アレクシス：かたじけない！　（独白）ここは男爵の家ではないな、どう考えても。しかし、この女の声はどこで聞いたのだったか？　（アンリに）たいへん失礼いたしました！　（挨拶し、出ていく）

第三場

アンリ、カトリーヌ

アンリ：あれは誰だろう？

カトリーヌ：一山当てようと企んでいる者でしょう、それが玄関を間違えたのですわ……。市場にはデュブールというロバがほかにもまだいるのです。

アンリ：だといいが……。もしも一家が男爵の位を夢見ていたら……。

カトリーヌ：まさか！　私にはどうしようもありません。どちらにせよ奥さまはすぐには戻りませんし。

アンリ：私はやはり奥さまと話がしたい。自分の運命を知っておきたいのだ！

第四場

アンリ、カトリーヌ、婦人帽子屋（女）、婦人服屋（女）、生地商（男）。みなおかしな格好をしている。

婦人帽子屋（厚紙の箱を手に）：デュブールさまのお宅は？

カトリーヌ：ここです。

婦人帽子屋：こちらが、奥さまがご注文された帽子です（箱から珍妙な帽子をとり出す）。

カトリーヌ（アンリに）：言ったとおりでしょう？

婦人帽子屋：勘定を持って今晩また伺います。（退場）。

カトリーヌ：これがひとつ目。奥さまが今朝からしていることです。

アンリ：デュブール氏からの便りを受けとったんだ。

婦人服屋：デュブールさまのお宅は？

カトリーヌ：二つ目。ここですよ。

婦人服屋：奥さまのドレスをお持ちしました。（きらきら光るドレスを広げる）。奥さまにお会いできますか？

カトリーヌ：外出中です。

婦人服屋：今晩また伺いますわ。（退場）。

カトリーヌ：勘定を持って、ね。行列ははじまったばかり、まだ幟が通り過ぎたあたりですわ。今度は教会の使用人です。

生地商：デュブールさまのお宅は？

カトリーヌ：ここがそうです。

生地商：奥さまに布の見本をお持ちしました。

カトリーヌ：奥さまはいらっしゃいません、どこにいらっしゃるか見当もつきません。

生地商：1時間後にまた伺います。（退場）。

カトリーヌ（アンリに）：ほら、このとおり。

アンリ：とんでもないことだ。どうしたら奥さまを破産から救えるのだろうか。

カトリーヌ：神さまのお手を煩わせるしかありません。ちょっと意見しただけでも、熱した竈のように怒りだす始末ですから……。ともかく面と向かって反対するのだけはいけませんよ……。奥さまに睨まれるようなことになれば、もうおしまいです。それよりも同じことを考えているふりをなさいませ。

アンリ：そうして奥さまを破滅に？　だめだだめだ。万一、デュブール氏が金を持ってきたとしても成金の行く末など知れたもの……。今朝も耳にしたばかりだ、エドワールの店が支払いを停止するらしいと。パリにあるサクラメントの大銀行なんだが……。

カトリーヌ：あなたさまならば問題はありませんでしょ。明日の犬 100 匹より今日の鼠 50 匹[28] でいれば……。

アンリ：いいや！　なすべきはこれだ。（手紙を書く。そして感情も露わに）。カトリーヌ、これを。もしもアンリエットとの結婚を拒まれたら、もしも私が追っ払われて、代わりにこの家が不幸になったら、そのときにはこの手紙を開けて、私が変わらぬ愛を捧げているあの方に渡すんだ。

第五場

アンリ、カトリーヌ、デュブール夫人（おどおどしながら入場）、クララ

アンリ：奥さま！

カトリーヌ：やっとおいでに……クララはどうされました？

デュブール夫人：インド商会に置いてきました。

カトリーヌ：質として？

デュブール夫人：（耳を貸さず）。帽子は届きましたか？　ドレスは届きましたか？　インドのショールは届きましたか？

カトリーヌ：お帽子はここに、勘定は今夜持って来るそうです……。

デュブール夫人：よろしいわ。次……！　真っ赤なビロードのドレス……12 メートルのものよ……。

カトリーヌ：ドレスはあちらに、婦人服屋は夜、勘定を持って来ます……。

デュブール夫人：すてきよ、すてきだわ……！　で、ショールは？

アンリ：（挨拶をしながら）奥さま！

デュブール夫人：（アンリに気づいて）あら、こんにちは、アンリさん……。で、私のショールは？　真っ白の、純チベット産の、商標つきのインドのショールは……どこにも見あたらないわ。

カトリーヌ：私にも見あたりません。まだ旦那さまの旅行鞄のなかではないでしょうか。

デュブール夫人：夫の！　（独白で）カトリーヌは知っているのかしら……。（声に出して）ねえ、カトリーヌ、もしカシミアが届いたら、私はいないって言ってちょうだい。

カトリーヌ：受けとらなくていいので？

デュブール夫人：おばかさんね！　逆よ……。そういえば、アンリさん、今日は私どもと一緒に夕食をとりますわよね？

アンリ：感謝いたします。ですが……。

デュブール夫人：招待をお受けなさいな……。すばらしいお夕食（ゆうげ）よ！　三品揃った……。オードヴルが何皿になるのかまだわからないのだけど。シュヴェに訊いてみなければ。ポタージュは 3 皿欲しいわ！　お前はどう思う、カトリーヌ？

カトリーヌ：（声をひそめてアンリに）ほら、私が言ったことをお忘れですか！

アンリ：奥さま、お話したいことがあるのですが。

カトリーヌ：（声をひそめて）まだですって！　ちょっと待って、私に任せて……。（デュブール夫人を脇に連れていき）奥さま、店の者たちはもう信用貸しはしたくないそうです。

デュブール夫人：そんなこと……！　明日には支払えるのに。

カトリーヌ：奥さま、あの者たちは歯に衣着せません。現金でないと、なに

もよこしませんよ。

デュブール夫人：不愉快なこと……！　宴はどうしましょう？　そうだわ、カトリーヌ、簡単なものをあなたが豪勢に盛ればいい……。社交界で、食卓の建築なんて呼んでいるものよ……。

カトリーヌ：なんですって？

デュブール夫人：大きな魚に、おいしいパテの皮を。中身はあんたがつくるのよ！

カトリーヌ：ですが、中身をつくるにも、皮を買うにも、なにもありゃしません！

デュブール夫人：ばかね！　シュヴェと話してどうにかするわ。台所にいきなさい、そして私のカシミアがきたら、丁重に受けとるのよ……。

カトリーヌ：ああ！　イエスさま！　主よ！　お慈悲を！

（クララ入場。片手に宝石箱、もう片手にカシミアの箱を持っている）

デュブール夫人：（箱に飛びつき、ショールを広げる）これよ、これ！　お前が持って来てくれたのね、いい子ちゃん……。私にキスをして、ここに来てこれを羽織ってみておくれ。（クララの肩にショールをかけ、見とれる）。きれいだわ！　本当にきれい！　フランス産のしか持っていないデュビュイッソンさんは腹を立てるでしょうね！　ああ、商標が見えるようにすればよかった！　（夫人はショールを折り返し、クララにもう一度あてようととする）。

カトリーヌ：一度で結構です、奥さま……。こんな無駄遣いは百日咳のように伝染しますから。

クララ：少しの我慢ですわ、お母さま。私の従兄弟が同じものを持ってきますのよ……。

カトリーヌ：あんなのはただのよ不要児[29]よ、その名を口にしてはいけません。

クララ：ありのままの彼が好きなんだもん。

カトリーヌ：（アンリに）あの言い方、お話したとおりでしょ。

クララ：あの人が信用に足る理由はあるんです。（示し合わせたような視線

をデュブール夫人に送る)。

デュブール夫人:(声をひそめて)。クララ、黙って!

カトリーヌ:じゃあ、そのサクレマントを待ちながら人参の皮剥きをしてちょうだい。(声をひそめてアンリに)で、あなたさまは、奥さまの脳ミソをなんとか元どおりになさって。奥さまが舞踏会用のヴォロヴァン(訳注:皮の薄いパイ)に詰めてしまう前に。そしたら私は犬どもに帯を投げてやります[30]。(クララを連れていく)。

第六場

アンリ、デュブール夫人

デュブール夫人:(ぼおっと身繕いをしている)アンリさん、まだいらしたの?　なにか私に話したいことでも?

アンリ:ええ、奥さま。前にもお話したことです。ご存じでしょう、私は愛しているのです……。

デュブール夫人:この帽子を……(被ってみる)。見て、いい形でしょ。ロールの店のものなのよ!―― 80 フラン、羽根飾りは別料金で。

アンリ:アンリエットお嬢さまの……

デュブール夫人:分もひとつつくらせるわ、そしたらあの子、私と一緒に歩くのよ!

アンリ:奥さまにひとつだけお伺いしたいのです、私が留守のあいだ、お嬢さまもまた奥さまのように豹変されたのですか?　お嬢さまもやはり、今の奥さまのように、身なりや飾りものを持つことに幸せを感じているのでしょうか?

デュブール夫人:(ドレスを見ながら)このドレスはパメラの店のものですのよ!　見ればわかりますとおり……!　ものの価値を高める芸術家ですわ……!　デュビュイッソンさんの仕事着と比べてなんておしゃれなのかしら!

アンリ:(悲しげに)これが最後です、奥さま、畏れながらお嬢さまの話を

させていただきとうございます。2ヶ月前、あの方は清貧の天使でした。その徳、その美に、私の裡に芽生えた感情ときたら。私は畏れ多くもお嬢さまとの結婚を申しこもうと考えました。そして奥さまのお話では、お嬢さまのお気持ちは私の希望を妨げるものではなかったとのことでした。

デュブール夫人：（笑いながら）ああ、結婚の話ね！　まだそのおつもりなの？

アンリ：（腹を立てて）お嬢さまはお忘れではありますまい！

デュブール夫人：アンリさん、率直に申しましょう。2ヶ月前のアンリエットは貧乏な建築家の娘で、分相応の生活、しきたりに従っておりました。それが今や裕福な資本家、百万長者の跡継ぎ……。

アンリ：百万長者ですと！　それは確かなのですか？

デュブール夫人：だって夫はカリフォルニアから戻ってきますのよ？

アンリ：ああ！　奥さま。どれほどの貧乏人がかの地に行き、赤貧になって戻ってきたことか！

デュブール夫人：なんですって！　ちょいと屈めば金（きん）の塊が拾える国なのでしょう？　貧乏人は金（きん）のお椀で物乞いをするという！　豊かすぎて、羊のもも肉に1オンス払ってるって！――まさか地上の楽園で夫がなにもせずに腕をこまねいていたとでも？

アンリ：奥さまはメダルの表しか見ておられない！　ですが裏の面があるのですぞ！　カリフォルニアで起こっている恐ろしい災害をご存じない。毎月の大火災、日々の戦い、夜ごとの殺人を。奥さまがいとも簡単にとれると思われているその金（きん）は、鶴嘴片手、銃片手で拾い集めているのです。そして金持ちになった植民者ひとりにつき千人が、飢えと貧窮で倒れているのですぞ。

デュブール夫人：（皮肉をこめて）では、夫がそっちの人間になればいいとでも？

アンリ：まさか！　奥さまの願いがかなうよう祈っています！　ですが、いいですか、もしもデュブール氏の企てが失敗したならば、私をあてにしていただきたい。

デュブール夫人：夫はやってくれますわ！――もうやりました！――夫が百万長者でないなどと言わせない……！　さあ、それを証明してみせますわ……おお、どうしたの……！　これはなんの音……！　なにが起こっているの？

第七場

アンリ、デュブール夫人、水運搬人（水運搬人は、通せんぼをしているカトリーヌとクララを荒っぽく押しのける。彼は入場し、母娘の鼻の先でドアを閉める）。

水運搬人：入るぜ、こんちくちょう！

デュブール夫人：（有頂天になって）お遣いの者よ！　私のカザヴェチ（訳注：casawech 不明。casaquin［キャミソールの一種］の類か。）だわ！　私のカザヴェチが届いたんだわ！

水運搬人：こんちくしょう、いつ払ってくれるかって訊いてるんでえ。

デュブール夫人：あら！　ガザヴェッチじゃない！　どなた？

水運搬人：水運搬人さぁ、オーヴェルニュにかけて！　うんでもって、あんたには 18 フラン 14 スーを払ってもらわにゃ！

デュブール夫人：ああ！　支払いを忘れてたわ！　どうしましょう！　怒らないで！　（ポケットを探して）。私の財布……。財布はどこ……？　なくすわけはないのに……なかに手形がたくさん入っているのよ！

水運搬人：ひと芝居うってやがるのか？　金を出すか、みんなぶっ壊すかだ。（テーブルのうえにあったデュブール夫人の帽子をはね飛ばす）。

デュブール夫人：やめて！　私の帽子！　ロールの店の帽子……！　財布がないなんて……すみません、アンリさん……ああ、気分が悪い。（椅子に倒れこむ。ヒステリーの発作）。

アンリ：（水運搬人に）いくらだね？

水運搬人：18 フラン 14 スーでさぁ、こんちくちょう！

アンリ：（財布を出しながら）20 フランだ、つりはいらぬから出ていくん

だ！

水運搬人：結構、結構！　ここから出ていきますだ……！　さいなら、みんなさま……こんちくしょう！　（退場）

アンリ：（独白で）晩餐に招待した者から20フランを借りることになるとは！　奥さまにこの教訓をわかってもらえたら。

第八場

アンリ、デュブール夫人

デュブール夫人：（意識をとり戻して）ああ！　やっと出て行ったのね……あの乱暴な男を追っ払ってくださってありがとう、アンリさん。

アンリ：（頭をさげて）もったいないお言葉で……。

デュブール夫人：ああ！　こんな騒ぎに私を立ち会わせるなんて、あの者たちには高くつくことよ！　私がだまされているとあなたが勘違いしないよう、お聞きかせしますわ、秘密は守ってください。

（1通の手紙を読む）「妻よ、3本マスト船セレス号がナントに着いたところだ。お前のもとに帰るよ、私は元気。船での用事が片づき次第、汽車に乗る。そしてお前の腕に飛びこもうか？

――君の夫、フランソワ・デュブールより」

アンリ：デュブール氏が！　お戻りになる？

デュブール夫人：手紙は一昨日のものです。ですから、もうじき着くことでしょう。

アンリ：それでアンリエットお嬢さまは……

デュブール夫人：社交界での地位があがるわ！

アンリ：（震えながら）奥さま、最後にもう一度お尋ねします、どうか本当のことをおっしゃっていただきたい。富と幸福についてアンリエットお嬢さまは、奥さまと同じ考えでいらっしゃるのでしょうか？

デュブール夫人：あなたも財を築けば、ねえ、すぐに慣れてしまうものだということがおわかりになるはずよ。（真顔で）。娘は知っているわ、近いう

ちに、いちばん低くても伯爵夫人にはなれることを……！　生まれたときから、そういう高い位につくことはわかっていたの。つまりは、その母親に見合った娘だってことは誰もが認めるところなのよ！

アンリ：（独白で）なんと！　ではもう私のことなど愛してはいないのか……！　私はお嬢さまを失った！　行こう、これ以上はもう耐えられない！

デュブール夫人：（アンリを引き留め、保護者ぶった口調で）ねえねえ！　こんなお別れの仕方でいいのかしら？　私どもの友情が怖いの？　お金持ちだから？　ねえ、アンリさん、私どもはあなたの出世をお助けしますわよ！

アンリ：どうかさがらせてください。（独白で）アンリエットお嬢さまと会うなど、そんな力は残っていそうにない！

デュブール夫人：さあ参りましょうよ！　私どもといっしょに夕食をとるのですよ！　子どものようなまねはよして！　友人としておつきあいしましょうよ。これからは、もっと気楽な間柄で、そして……。（第八場終わり、以下次回）。

カトリーヌの言い替え

n°	page	カトリーヌの台詞（原文）	正しい語、諺、慣用句
1	102	franc comme l’acier 鋼のように正直	franc comme l’or 金のように正直（＝謹厳誠実）
2	102	la queue sur la main 手のうえの尻尾	avoir le cœur sur la main 手に心を載せて渡す（＝親切だ）
3	102	tout n’est pas rose dans l’habit 服のなかは薔薇色ばかりではない	tout n’est pas rose dans la vie / La vie n’est pas toujours rose 人生は薔薇色ばかりではない（＝人生山あり谷あり）
4	102	vous avez pris le chemin des espaliers 果樹でできた壁の道を行く	prendre le chemin des écoliers 児童の通り道を行く（＝道草をする）
5	102	mieux vaut lard que navet カブよりもラードのほうがまし	mieux vaut tard que jamais 遅くなってもないよりはまし

6	102	c’est de l’or en barque 小舟型の金	c’est de l’or en barre それは金の延べ棒だ（＝そのものの価値は確かなものだ）
7	102	voilà le chien blanc dans la tisane 煎茶のなかの白い犬	voilà le chiendent それはハマムギだ（＝それはやっかいだ；ハマムギの根は除去しにくいことから。またその根は煎茶の材料になる）
8	102	il y a du tractric バックギャモン（盤双六）	le fric-frac (?) モノが壊れる擬音、それから転じて、押し入り強盗
9	102	la bourgeoise a perdu le strapontin バッスル（スカートの後部を膨らませる腰当て）をなくす	（不明）
10	102	Califorgnie カリフォルニアの綴り違い	Californie カリフォルニア
11	103	il a pris les saucisses pour des lanternes ソーセージとランタンをとり違える	prendre des vessies pour des lanternes チューブとランタンをとり違える（＝ひどいだまされ方をする）
12	103	il ramassait l’or à la pelle シャベルで金（きん）を集める	ramasser l’argent à la pelle シャベルで金を集める（＝大もうけする）
13	103	la tête de madame a tourné comme une gibelotte フリカッセ（料理名）のように回る	tourner comme une girouette 風見鶏のように回る（＝意見がたびたび変わる）
14	103	ne pousse pas toujours qui danse ! 踊る人を押すな！	n’épouse pas toujours qui danse ! 踊りに誘うだけでは結婚はできない（？）
15	103	Sacré-manteau すばらしいコート	Sacramento サクラメント（カリフォルニア州の首都）
16	103	un nom chrétien キリスト教徒の名	nom d’un chien こん畜生
17	103	un petit drôle qui voulait trancher du monsieur	（不明）
18	103	un sauvage l’avait escalpé エスカロップにする（造語）	scalper 頭皮を剥ぐ

19	103	c'est comme si j'avais chanté au dessert ! デザートの時間に歌う	chanter au désert 砂漠に向かって歌う
20	103	rira ben qui rira derrière ! 背後で笑うものがよく笑う	rira bien qui rira le dernier ! 最後に笑う者がよく笑う（＝人を笑う者はいつか自分が笑われる）
21	103	Il y a quelque anguille sous cloche 鐘のしたにウナギがいる	Il y a anguille sous roche 岩のしたにウナギがいる（＝裏になにかがある）
22	103	elle met les petits pois dans les grands 大豆に小豆を入れる	mettre les petits plats dans les grands 大皿に手のこんだ料理を盛る（＝一生懸命ごちそうをつくる）
23	103	un festin de Salbazar サルバザールの宴。音としては「こきたない市場（sale bazar）」	un festin de Balthazar バルタザールの宴（旧約聖書「ダニエル書」五章）
24	104	Faut que je m'habille en torchon bleu 青いぞうきんを着る	s'habiller en cordon bleu コルドンブルーに扮する（＝名料理人になる）
25	104	Ne point jeter la manche après la poignée 取っ手のあとに柄を投げる	jeter le manche après la cognée 斧のあとに柄を投げる（＝すぐあきらめる；斧の鉄の部分がはずれて水に落ちてしまったあと、ひき揚げるのをあきらめて、柄も投げてしまった木こりの話から）
26	104	Quels yeux de larynx ! 喉頭の目	avoir des yeux de lynx 大山猫の目をしている（＝目つきが鋭い）
27	105	Saint-attrape-sot バカを捕まえる聖人	San Francisco サンフランシスコ
28	107	Un bon chien vaut mieux que deux plus gros rats １匹の賢い犬のほうが、もっと太った２匹のネズミよりいい	Un tiens vaut mieux que deux tu l'auras いつか手にする二つより、「ほらどうぞ」とひとつもらえるほうがいい（＝明日の 100 より今日の 50）。ラ・フォンテーヌの寓話「小さな魚と釣り人」で広まった諺。
29	109	un va-sur-pieds 足のうえをいく者	un va-nu-pieds 裸足でいく者（＝浮浪者）
30	109	J'en jette ma sangle aux chiens. 帯を犬に投げる	（不明）

ページ数は拙訳の底本としたMarc SORIANO, *Portrait de l'artiste jeune. Les quatre premiers textes publiés de Jules Verne*, Gallimard, Paris, 1978収録版のもの。カトリーヌの言い換えについては同書の編者であるマルク・ソリアーノの分析があり（ibid., pp. 40–42）、上記の表もそれに多くを負っているが訳者が見つけたもの、ネイティヴ・スピーカーの意見を聞いたもの、未だ不明の箇所がある。ソリアーノはまた登場人物の固有名Henri/Henrietteにrire, Dubourgにbourgeoisが隠されていると指摘する。

以下、いくつかの項目についてルーセルとの比較考証への布石の意味で、通し番号にそって註釈をつける。

（2）ソリアーノはla queueを「陰茎」の意にとり（あるいはこの慣用句をtout n'est pas rose dans la bite＝陰茎、と読み替え）、ヴェルヌの言葉遊びに性的な含意を探る（ibid., p. 41）。queueはルーセルのテクストでも重要な語。

（8）fric-flacは筆者の質問に対し、オリヴィエ・ベッサール＝バンキ氏（ボルドー第三大学准教授）が出した試案。これが言い替えの元となった表現であるかは検討の余地があるが、ヴェルヌにはFritt-Flaccという短編（初出1884年）があるため、インスピレーションとしては興味深い。

（9）言葉遊びがあると推測されるが判明しなかった。ルーセル『アフリカの印象』ではむしろcorsetが問題になる。strapontinもcorsetも鯨の骨ででき、女性の身体のシルエットを矯正するもの。

（11）ルーセル『新アフリカの印象』第二歌ではこのprendre A pour Bの例が200以上続く。たとえば« [il ne faut pas prendre] pour un œuf au plat seul à l'écart, / Salé ferme à son centre, un baissé crâne à rite / D'âgé prêtre à jaunisse.» 両者の関連づけの発想もこの慣用句のそれと類似する。vessie（膀胱でつくった袋）もきわめてルーセル的な語彙。

（12）これは言い換えとまではいえないが。

（14）元の表現n'épouse pas toujours qui danse！はソリアーノの指摘だが意味は不明。この命令形のみtutoyerしていることからデュブール夫人に対しての言葉とは解釈しずらく、なんらかの慣用表現が隠されていると思われるが今回の調べでは見つけ出すことができなかった。

（16）言葉遊びの有無については要再考だが。

（18）ソリアーノが指摘するように、料理女であるカトリーヌの言葉遊びには料理や食材にちなむ語彙が少なくないためこの訳語を採った。

(23) バルタザールの宴の逸話はルーセル『新アフリカの印象』第四歌にも見られる。« [...] sur son mur Balthazar / Vit, en traits défiant le grattoir et la gomme, / Trois mots de feu briller... puis s'éteindre».
(28) ラ・フォンテーヌ『寓話』もルーセルが好んだ作品。

なおカトリーヌはすべての慣用句を地口にしてしまっているわけではなく、そのままの使用も少なくない。たとえばVous nous aviez mis dans les oubliettes（地下牢へ落とす＝すっかり忘れる）、J'ai eu beau lui corner aux oreilles（耳を折る＝口やかましく言う）など。